



# 大網ロータリークラブ Club Weekly Bulletin



- クラブ創立：2000年1月13日
- 例会日：水曜日（12：30～13：30）
- 例会場：中部コミュニティセンター  
TEL 0475-73-3337 FAX 0475-73-4360
- 事務所：〒299-3251  
大網白里市大網 450-6 ユアサビル 2 階  
TEL 0475-70-0200 FAX 0475-70-0222
- 会長：石田 英世 幹事：高野 祐二
- 広報・公共イメージ向上委員会  
委員長 大越 将司・会報担当 石田 英世

2025年5月7日(水)  
第26巻 第40号

通巻第1114号

<http://www.oamirotary.com>  
E-mail: [rc@oamirotary.com](mailto:rc@oamirotary.com)



## 本日の例会

点 鐘 会長 石田 英世  
唱 和 四つのテスト  
ソング 奉仕の理想  
会長挨拶 会長 石田 英世  
幹事報告 幹事 高野 祐二  
プログラム

1. 奨学金授与式 サジャーニ様  
※5/14に変更
2. 子ども食堂協賛金贈呈
3. 5月誕生日祝い  
花澤正明会員・小高 徹 会員  
渡邊孝太会員・綿貫一男会員
4. 市出前講座

## ニコニコBOX

無し

例会日	4月23日	4月9日
会員数	29	29
出席	17	16
欠席	12	13
M U	0	0
免除	6	5
出席率	79%	72%

## 会長挨拶

石田 英世 会長



みなさん、こんにちは。  
本日はあいにくの雨模様の天候ですが、世の中は春真っ盛りの花の季節を迎えています。  
あれほど賑わしていた桜はあっという間に駆け抜け、先週シバザクラの満開のニュースが届きました。  
場所は香取郡東庄町「東庄ふれあいセンター」です。  
県生涯大学校東総学園の卒業生が2013年に「東庄町芝桜の会」を発足し、センター敷地内の空き地にシバザクラを植え始めた。当初の栽培面積は100平方メートルほどだったが、年々広げ、今では6600平方メートルに拡大。

お花畑は、敷地いっぱい広がっているそうです。  
当クラブでは本年より市の花であるコスモスを咲かす事業に取り組んでいます。  
秋には満開のコスモスが来場者の目を癒してくれるのを期待しています。  
みなさんのご協力よろしくお願いたします。



卓 話

大網白里朗読の会 山口妙子様 他1名



著者紹介 藤沢周平（ふじさわ・しゅうへい）  
昭和2（1927）年、鶴岡市に生れる。  
山形師範学校卒。48年「暗殺の年輪」で第69回直木賞を受賞。主要な作品として「蟬しぐれ」「三屋清左衛門残日録」「一茶」「隠し剣孤影抄」「隠し剣秋風抄」「藤沢周平短篇傑作選」（全四冊）「霧の果て」「海鳴り」「白き瓶小説 長塚節」（吉川英治文学賞）など多数。平成元年、菊池寛賞受賞、平成6年に朝日賞、同年東京都文化賞受賞、平成7年、紫綬褒章受章。「藤沢周平全集」（全23巻 文藝春秋刊）がある。  
平成9年1月逝去。歿後、「漆の実のみのる国」「早春」「静かな木」「藤沢周平句集」が刊行された。

<十三夜> 十三夜の日に大工をしている旦那の帰りを待つ、女房の話です。

入り口にひとの気配がしたので、お才は夫が帰って来たのかと思って、いそいで立ち上がった。だがすぐに女の声がして、出てみると隣の鍛冶屋の女房だった。

於：TKP 東京ベイ幕張 幕張ホール



セミナーお疲れ様会 Kitchen HALEにて



「ごねんね、こんな遅くに来て」

おすえという名の隣の女房は、いつもの甲高い声でそう言った。痩せて背が高い三十女である。

「どうしたの？」

「すすきが余ってないかと思ってさ。いえね、あたし今日は本所の実家に行って来たの。帰って見たらお月見だというのに何の仕度もしてないじゃない。まったく男ってのはしょうがないねえ」

鍛冶屋の亭主は、体格はいいがのっそりした無口な男である。

「それでも子供に言われて、枝豆だけは買ってあったからさ。いまその豆を茹でてんだけど、子供は子供であんた、もう眠くなっちゃって眼エ半分しかあいてないの、お月見を済まさないや寝ないなんて言うんだから、ほんとにしょうがない」

おすえはひと息にまくし立て、ひとりて笑ってからやっと肝心の用に話をもどした。

「すすきないかしら。ほんの一、二本でいいんだけど」

「いいよ、わけてあげる」

とお才は言った。隣の仕事場に飾ってある月見の飾りの中から、すすきを数本抜き出して、もどるとおすえにわたした。受けとりながら、おすえは言った。

「片月見はしないものだっていうからね。格好だけのことでもするだけのことはしなくちゃ」

と言って、はじめてわたされたすすきを見る。

「あら、わるいね。こんなに沢山もらっていいかしら」

「かまわない、かまわない。ウチは少し余分なほどに買ってしまったから」

「そう、わるいね。いつも無理言っちゃって、すみませんね」

それで帰るかと思ったら、おすえはすすきを胸に抱いたまま、首をのぼして仕事場をのぞくようなしぐさをした。小声で言う。

「ご亭主、帰ってるの？」

「まだなのよ」

とお才は言った。だが、わざとそっけない口調でつぶけた。

「でも、そろそろ仕事も終いだそうだから、今日明日にはもどるんじゃないかしら」

「そう」

おすえは、お才の顔をじっと見た。

「でも、今度は長いね」

隣の女房を送り出すと、お才はびしゃりと表戸をしめて、仕事場にもどった。あけはなした格子窓から、十三夜の月の光が溢れるほどにさしこんでいて、灯もいらなかった。

窓から少しはなして据えた机の上に、皿に乗せた団子、別の盆に盛った栗、枝豆、皮のまま茹でた里芋がそなえてある。十五夜の月見団子は餡を使い、十三夜の団子には黄粉を用いる。

瓶にさした机の上のすすきが、隣にわけてしまっただけになつたのを形をつくらうってから、お才は床にじかに敷いた薄べりの上にぺたりと坐った。

—いやな女だ。

と思った。鍛冶屋の女房のことである。

今日の昼すぎ、お才は月見にそなえる物を買いに町に出たついでに、角の瀬戸物屋に寄った。死んだ母親ぐらゐの歳ごろの、その店のおかみにかわいがられていて、お才は時には買うものがなくてもこの店に来て気を許したおしゃべりをする。

お才は五年前に、菊蔵と所帯を持ってこの町に住みついた。十九だった。瀬戸物屋は、看板の瀬戸物のほかに荒物も売っていたので、新所帯の物をそろえるためちよいちよい買い物に来ている間に、おかみとも親しくなったのである。世話好きな瀬戸物屋のおかみは、所帯のことにまであれこれと口を出し、近ごろは「まだ子供ができないっていうのは、どういうことだい」などと言ったりする。

今日お才は、木更津に仕事に行った菊蔵が、昨日にはもどると言ったのに、まだ帰らないとこぼした。そういう愚痴を言える相手だった。するとおかみが言った。

「あんた、それ、ほかのひとには言わない方がいいよ」

「あら、どうして？」

お才はびっくりしておかみの顔を見た。菊蔵は鑑札をもらったばかりの大工で、もとの親方の指図であちこちと遠方まで仕事に行く。そのために家をあげがちでお才は味気ない思いをしているが、それは棟梁になるまでに辛抱である。そのどこがいけないのだろう。

「変なうわさを立てるひとがいてね」

おかみはお茶をすすめながら言った。

「いくら大工でも、あんなにしじゅう家を留守にするのはおかしいとか、女がいるんじゃないとか、はては深川あたりで、ご亭主が女と一緒にの場所を見かけたとか、言うひとがいるんだよ」

「だれ？ そんなことを言うのは」

お才は一瞬あつけにとられたが、すぐに胸が高鳴るのを感じた。お才はそういう話を笑い流すことが出来ないたちである。

「誰って、名指しはしないけど、お隣なんかには、気をつけて口をきいたらいいんじゃないの」

おかみはそう言ったのだ。お隣といえば鍛冶屋の女房に決まっていた。おすえはこの町で指折りのおしゃべりで、それにもう片方の隣は、年寄り夫婦が細々とやっている絵草紙屋なのだから。

—よくも図々しく、すすきをもらいに来られたもんだわ。

あれは菊蔵がもどったかどうかと、様子を見に来たに違いないのだ。すすきなん



ガバナー事務所より  
大船渡大規模山林火災支援の御礼

2025年(令和7年)2月26日に岩手県大船渡市で発生した山林火災は、4月7日に鎮火が宣言されました。大船渡市赤崎町合足地区や三陸町綾里の広範囲が焼失し、焼失面積は2025年3月6日14時時点で2900haにのぼっています。1992年(平成4年)の北海道釧路市で発生した山林火災(焼失面積1030ha)を上回り、平成以降日本最大規模の山林火災となりました。

<お礼状>

このたび令和7年2月26日に発生した大船渡大規模山林火災に際し、全国のロータリークラブ会員の皆様より、温かいご支援とご厚情を賜り心より御礼申し上げます。

お寄せいただきました義援金は、被災地域の復旧活動および被災された方々の生活支援に有効に活用させていただきます。皆様のご厚意は、当事者にとって大きな励ましとなっております、深く感謝申し上げます。

被災地の1日も早い復旧・復興に向け、我々も引き続き全力を尽くしてまいります。今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

まずは略儀ながら書中をもちまして、御礼申し上げます。

支援金額 金 2,229,066 円

2025年4月25日 上記金額をお預かりいたしました。

かありませんと、びしゃりとことわれればよかったと、お才はいまごろになってくやしさがこみ上げて来る。

自分が知らないところで変なうわさがささやかれていることを知って、お才は一人は顔がひきつたが、じっくり考えてみても思いあたることは全くなかった。菊蔵から女の匂いを嗅ぎつけたこともないし、第一自分は夫にかわいがられている。夫婦の間に隙間を感じたことなどない。うわさを真にうけて、仕事で疲れている夫に変なことを言ったりしない方がいい、と思った。

不快な気持ちは夕方には消えて、お才はさっぱりした気分で月見の飾りつけにかかったのである。一度落ちついたその気持ちが、おすえが来てまたかき乱されたようだった。じっとしていると、消えたはずの蟬りが、黒々と胸を染めるようでもある。まだもどらない菊蔵に、いやなうわさが重なる。

お才は急に立ち上がって、仕事場を出た。お才は鏡をのぞきこんだ。化粧でもして気をまぎらせるつもりだったのに、鏡の中の顔は変に醜かった。紅が濃すぎる。お才は紙をとると荒々しく唇の紅を拭き取った。

今度は台所から水を持って来た。芝居を見に行くときのように、もろ肌ぬぎになっとうすく白粉を使い始める。

—浮気なんかしたら承知しないから。

手を動かしながら、お才はそう思っている。お腹の子供だって水子にしちゃうからね。

月のものがとまっていた。二月になる。前にもそんなことがあったが、それはただの身体のごあいものだったので、夫婦はがっかりしたことがある。だが今度は本物らしかった。お才は近ごろ食欲が落ち、喰い物の好みも変わったような気がしていた。

喰い物のことだけでなく、気持ちにも照りかげりがあり、あとになってみると何でもないようなことにひどく気を苛立てたり、くよくよと思い悩んだりすることがある。身籠もったのだ、とお才は思っていた。

菊蔵は子供を欲しがっているのだから、打ち明ければ大喜びするだろう。だがお才はまだ話していなかった。もっとはっきりしてからと思っていた。だが、いま唇に紅をひきながら、お才は変に残酷な気分になっている。隠し女なんかいたら、子供なんか生んでやらないから、と思っていた。

化粧が終わると、お才はあらためて鏡の中をのぞきこんだ。お才がむかっている鏡台は、指物師の父親が、娘の嫁入りというのではりきってこしらえたもので、一点のゆがみもない上質の鏡がはまっている。その鏡の奥に、うつくしい裸身が映っていた。

—このあたしの、どこが不足なのよ。

自分の身体に見とれながら、お才は胸の中でつぶやいた。

お才はひそかに、自分はそんなに悪い器量の女ではないと思っている。菊蔵も男っぽくていなせな男だが、嫁入るときには似合いの夫婦だと言われた。鏡をのぞいていると、その自信がもどって来るのを感じた。変なまねはしない方が身のためだよ、お前さん、とお才はまた胸の中でつぶやいた。

お才はまるい乳房を両手ですくい上げるようにして鏡に映してみた。身籠ると乳首のいろが変わると聞いていたが、そのしるしはまだあらわれていなかった。胸をよじって乳房を映している、突然に表の戸があいた。つづいて菊蔵の大きな声が聞こえて来た。「おーい、いま帰った。腹へった」

お才はあわてて肌を隠した。その間にも菊蔵は、疲れた疲れた、何か喰わしてくれと言っている。お才は大いそぎで着物を着ると、すすきの水を持って出て行った。みると菊蔵は、腕いっぱいすすきを抱えて土間に立っている。

「お帰り、遅かったじゃないか」

「仕事が一日のびた。吉助も弥三郎も、いま一緒に帰って来たところだ」

「そのすすき、どうしたの？」

「途中にすすき売りがいたから、くれて言ったら、いやもう、たんとまけてくれたぜ」

「それじゃさっそく飾らなきゃ」

お才はすすきを受けとった。その顔を見て、菊蔵が眼をまるくした。

「お、お。めっぽうきれいだと思ったら、かみさんは寝化粧で待ってたな。そうじゃねえかと思って、おれも走って来たぜ」

「ばあか、待ってなんかいませんよ」

憎まれ口を叩いてお才は仕事場に入った。すすきは瓶に溢れるほどあった。足を洗いながら、菊蔵は仕事の話をしている。ふん、ふんと相槌を打ちながら、お才は胸の中の思い蟬りがいつの間にか消え、何でもない日常の暮らしがもどって来たのを感じている。そろそろ子供のことを打ち明けなきゃ、と思った。活け終えたすすきの穂が、月の光を浴びて、まぶしく光るのに見とれた。

